

小学校の異年齢集団交流による児童間の親密度の変化

岡本悠子*・大野桂**・小枝達也***

Change of the closeness between students by cross-age interaction in elementary school

OKAMOTO Yuko*, OHNO Katsura**, KOEDA Tatsuya***

キーワード：特別活動 異年齢集団による交流 親密度 小学校

Key Words：Special activities, Cross-age interaction, Closeness, Elementary school

I. 要約

学童期において異年齢集団による交流は社会性の向上につながると考えられている。小学校における特別活動では異年齢集団による交流が設定されているが、学校行事における異年齢集団交流によって異年齢の児童間の関係性がどのように変化するかは明らかになっていない。本研究では、①和太鼓演奏および②休み時間の自由遊びの2つの異年齢集団による交流の前後で、異年齢の児童間の親密度がどのように変化したか検討した。その結果、休み時間の自由遊びでのみ異年齢の児童間の親密度が有意に増加した。この結果は、児童主体の自由な遊びが異年齢の児童間の密接な関係性の構築を促す可能性を示唆するものである。

II. 背景

学童期において異学年集団活動を経験することは、社会性の向上につながると考えられている(笠井 2007; 開 2009)。例えば、笠井ら(2007)は、小学生時に異学年集団活動であるスポーツ少年団に参加した経験がある中学生は、友達にあまり話しかけない、友達と離れて一人で遊ぶなど、他者との関係を回避し孤立する行動が少ないことを示した。しかし総務庁の調査では、小学4-6年生の約30%が「学年の違う子供と一緒に遊ぶ」ことがあまりない、めったにないと回答しており、日常生活において異学年集団活動の機会がない小学生が少なくない(総務庁 2000)。

こうした現状から、2008年に改訂された小学校学習指導要領では好ましい人間関係の構築や社会性の育成を目指し、特別活動において異年齢集団による交流がより重視された(小学校学習指導要領 特別活動編 2008; 小学校学習指導要領解説 特別活動編 2008)。これまでいくつかの調査によって、異年齢集団による交流による児童個人内の変化や、異年齢集団による交流が楽しいかなど児童の評価について報告されてきた(金谷 2013; 金子 1997)。例えば、金谷らは質問紙および行動観察

*鳥取大学地域学部

**鳥取大学附属小学校

***鳥取大学地域学部地域教育学科

に基づいて、小学校での異年齢集団による交流の前後の人間関係形成能力・自治的能力について検討している（金谷2013）。

しかし、学校行事における異年齢集団による交流によって、異学年の児童間の関係性がどのように変化するかは明らかになっていない。特に、社会性の育成を目的としていることを考えると、異学年交流によって交流以外の機会に異学年の児童間のコミュニケーションが取れるような関係性が築ける活動であるかも、異学年交流の評価において重要なポイントの一つと考えられる。そこで本研究では、鳥取大学附属小学校で実施されている①和太鼓演奏および②休み時間の自由遊びの2つの異年齢交流の前後のグループ内の児童間の親密度を検討した。

Ⅲ. 方法

1. 実施手順及び実験参加者

本研究では鳥取大学附属小学校で実施される異年齢集団活動である、和太鼓演奏および休み時間の自由遊びを対象とした。

和太鼓演奏では、4年生、5年生、6年生の希望者を対象に、9月に行われる運動会での演奏のため5月から継続的に練習を行った。和太鼓演奏の希望者の79名の児童を4グループに分け、各グループ週1回20分間の練習を行った。本研究ではこのうち、12名で構成される1グループを対象にした。

わくわく班と呼ばれる休み時間の自由遊びは、全学年を対象に1年を通して週1回30分間、休み時間に6年生の企画のもと遊ぶ活動である。活動は4月に開始し、3月まで同集団で行われる。1グループは各学年約4名、全学年で約24名で構成される。全校で18グループある自由遊びグループの中から、和太鼓演奏に参加する児童のいない1グループを選出した。

また、和太鼓演奏に参加しておらず、休み時間の自由遊びで同グループにならない児童を統制グループとした。

実験参加者は、和太鼓演奏グループ、自由遊びグループ、統制グループそれぞれ4年生、5年生、6年生各4名、計12名を選出した。和太鼓演奏グループは男子2名、女子10名、自由遊びグループは男子5名、女子7名、統制グループは男子6名、女子6名であった。また、統制グループのうち、4年生の女子1名は10月の質問紙調査の際に欠席したため、この1名の回答を解析から除外した。

和太鼓演奏グループと自由遊びグループの活動時期が異なるため、全グループの1度目の質問紙調査は和太鼓演奏グループの活動が開始される5月に実施し、全グループの2度目の調査を和太鼓演奏グループの終了した10月に実施した（図1）。

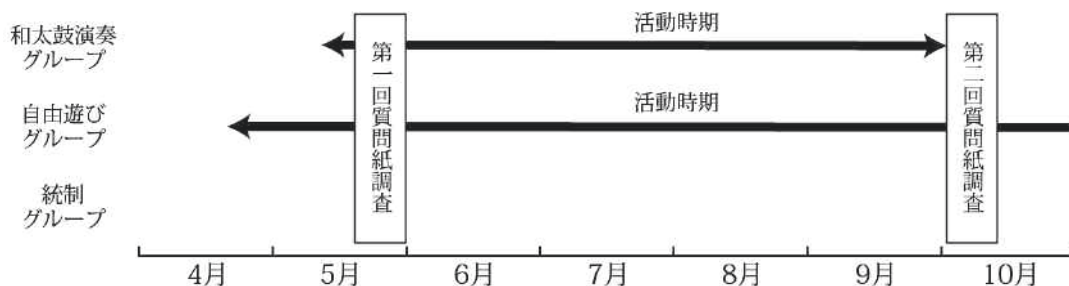


図1 実施手順

2. 質問票およびデータ解析

実験参加者は5月および10月にグループ内の他の児童11名に対する親密度を全く親しくないからとても親しいまでの5段階で評定した。以下のように、児童にわかりやすいように親密度の各段階に具体例を示した。

1. 全く親しくない 顔と名前も一致しない。
2. あまり親しくない 顔と名前はわかるが、あいさつを交わしたり、話をしたりしない。
3. どちらともいえない 顔と名前を知っていて、あいさつ程度は交わす。
4. やや親しい 顔と名前が一致して、あいさつを交わしたり、一緒に活動したりする。
5. とても親しい すごく仲がよく、学校外でも遊んだり、共通の活動に取り組んだりする。

グループ内の児童全体に対する親密度の変化を検討するため、各被験者の回答したグループ内の11名の親密度の平均を算出し、5月時点と10月時点の親密度を対応のあるt検定を用いて比較した。また、グループ内の異学年・同学年の児童に対する親密度の変化を検討するため、同被験者内で異学年の児童に対しての回答と、同学年の児童に対しての回答を分け、それぞれの平均を算出し、5月時点と10月時点の親密度を対応のあるt検定を用いて比較した。

IV. 結果

1. グループ内の児童全体に対する親密度の変化

対応のあるt検定を用いて5月と10月のグループ内の児童全員の親密度を比較した結果、自由遊びグループでは有意に親密度が増加した ($t(11) = 2.8, p < 0.05$)。一方、和太鼓演奏グループおよび統制グループに有意な親密度の変化は見られなかった(和太鼓演奏グループ; $t(11) = 2.1, p > 0.05$, 統制グループ; $t(10) = 1.6, p > 0.1$) (図2A)。

2. グループ内の異学年・同学年の児童に対する親密度の変化

対応のあるt検定を用いて5月と10月のグループ内の同学年および異学年の児童の親密度を比較した結果、自由遊びグループの異学年で有意に親密度の増加が認められた ($t(11) = 3.1, p < 0.01$)。一方、自由遊びグループの同学年、和太鼓演奏グループの同学年および異学年、統制グループの同学年および異学年では有意な親密度の変化を示さなかった (自由遊びグループ 同学年: $t(11) = 1.4, p > 0.1$; 和太鼓演奏グループ 同学年: $t(11) = 0.8, p > 0.4$; 和太鼓演奏グループ 異学年: $t(11) = 2.0, p > 0.05$; 統制グループ 同学年: $t(10) = 1.1, p > 0.3$; 統制グループ 異学年: $t(10) = 1.1, p > 0.2$) (図2B, 図2C)。

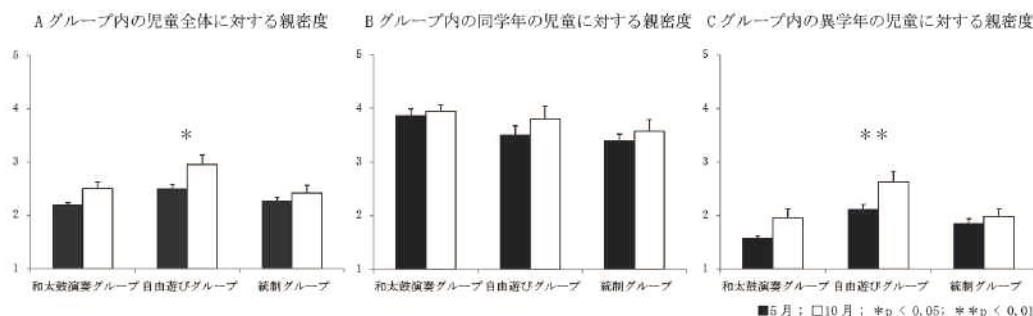


図2 5月および10月の各グループの親密度

3. 自由遊びグループの異学年の親密度の回答数

有意な親密度の増加が認められた自由遊びグループの異学年について、具体的にどのような変化があったのか検討するため、自由遊びグループの異学年の親密度について5月と10月の親密度の各段階について回答数を検討した。5月と10月の回答数は、項目1(例:顔と名前も一致しない)では22から3に減少し、項目3(例:顔と名前を知っていて、あいさつ程度は交わす)では9から22に、項目4(例:顔と名前が一致して、あいさつを交わしたり、一緒に活動したりする)では9から18に増加した(表1)。

	5月	10月
1 全く親しくない	22	3
2 あまり親しくない	54	51
3 どちらともいえない	9	22
4 やや親しい	9	18
5 とても親しい	2	2

表1 自由遊びグループの異学年の親密度の回答数

V. 考察

本研究では、自由遊びグループの異学年でのみ児童間の親密度が有意に増加した。さらに、自由遊びグループの異学年間の親密度の増加の背景として、あいさつをしたり、一緒に活動したりするなどコミュニケーションの機会の増大が大きいと考えられた。この結果は、異年齢集団での自由遊びを通じた活動が、交流以外の日常生活において異学年の児童間の実際のコミュニケーションを増大させるきっかけとなる可能性を示唆している。

1. 自由遊びグループの親密度増加の要因

国立教育政策研究所生徒指導研究センターから提示された、『子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」—活動実施の考え方から教師用活動案まで—』では、異年齢の交流活動のポイントを、①関わる喜びが獲得できる活動であること、②年長者が主体的に取り組むこと、③全職員が目的・子どもが育つメカニズムを理解し適切に対応することとしている(国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2011)。鳥取大学附属小学校における自由遊びグループでは、遊びという活動自体に児童同士の関わりがあるだけでなく、6年生が遊びの計画を立て、主体的に活動を行っている。さらに、職員もできるだけ児童主体で活動が行えるよう、支援を行っている。こうした工夫が異学年の児童間の親密度の向上につながったと考えられる。

2. 今後の課題

笠井ら(2007)は、スポーツ少年団の経験がある中学生は、社会的スキルが高いことを示したが、スポーツ少年団では最年少者、最年長者の入れ替わりがあるものの、1年ごとに集団が変わるのではなく、他学年の集団は比較的維持される。一方、鳥取大学附属小学校で行われている異年齢集団での自由遊びでは、1年ごとに全く異なる集団を設定して活動を行っている。本研究では活動を行っている約5か月間の親密度の変化を検討したため、全学年での自由遊びによって築かれた異学年の児童間の親密度やコミュニケーションが、1年間の活動が終わっても持続するかは不明である。今後、より長期間の調査を行うことで、全学年での自由遊びによって築かれた異学年の児童間の親密度やコミュニケーションがどのように保たれるのか、発展するか追跡調査を行う必要がある。さらに、異年齢集団の交流を通して築かれた異学年の児童間の関係性が、その後の児童の社会性の発達にどのように影響を与えるのか検討する必要がある。

謝辞

本研究は、学術振興会科学研究助成事業 基盤研究(S) 課題番号21220005「向社会行動の神経基盤と発達過程の解明」(主任研究者 定籾規弘)によって行われた。

VI. 引用文献

笠井達夫 松村昌弘, 学童期における異年齢集団活動と社会的スキルの習得 (2007) 徳島文理大学研究紀要 74, p43-p53

開浩一 柿森昭長, 異年齢集団活動が児童の発達に関わる可能性 (2009) 長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要 7(1), p39-p45

総務庁青少年対策本部, 低年齢少年の価値観等に関する調査 (2000)

文部科学省, 小学校学習指導要領 特別活動編 (2008)

文部科学省, 小学校学習指導要領解説 特別活動編 (2008)

金谷行恵 梶井芳明, 社会的な資質を育む特別活動の在り方に関する研究: 異学年交流における小学6年生の活動に着目して (2013) 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系 64(1), p139-p151

金子劭榮 水谷内郁子, 小学校における異年齢交流実践と児童の受けとめ金沢大学教育学部紀要 教育科学編 (1997) 46, p193-p201

文部科学省 国立教育政策研究所 生徒指導研究センター, 子どもの社会性が育つ「異年齢の交流活動」-活動実施の考え方から教師用活動案まで- (2011)

(2014年1月31日受付, 2014年2月10日受理)

